

〔二上り〕 一張の弓の勢は、月心にあたり、三尺の剣の光は、露腰にあり
頃は皐月の末つ方、楠判官正成は、君の仰せを蒙りて、一族郎党五百余騎
けふを最後と九重の、都を後に手束弓、駒をば暫く桜井の、宿に止めて

〔本調子〕 青葉蔭、嫡子帯刀正行を、近く召して申しけるは

如何に正行聞き候へ、獅子は我児を千仞の谷へ、落して気合を見るとかや
況して汝は十一才、父が教を忘れなよ

そもそも今度の合戦は、天下分目の晴軍、父は兵庫に討死と、心を決して候ふぞ

汝はこれより故郷へ、疾々帰れと促せば

正行涙せきあへず、いかで是より帰るべき、枉げても伴ひ候へや

正成心を励まして、聞分けの無き我子かな

我亡き後は將軍の、天下となりて日月は、光を失ひ申すべし

汝一旦の身命を助からんとて、敵に降り候ひそ

生き残りたる郎党を、扶持して再び旗を挙げ、叡慮を安んじたてまつれ、これ第一の孝行と、
形見に与ふ恩賜の刀

正行これを押戴き、泣く泣く帰る後影、見送る父は鎧の袖に、伝ふ涙やほととぎす、声を
残して西東、別れてこそは下りけれ

〔大薩摩〕 さる程に、淡路の瀬戸や鳴門の澳、霞の晴間を見渡せば、数万の兵船漕ぎつらね、
帆影に見ゆる山も無し

陸は播磨路須磨の浦、鴨越の方よりも、二つ引両四つ目結、輪違の旗翻々と、磯山風に吹き
靡かし、雲霞の如く寄せかけたる

敵を前に正成は、湊川にぞ陣を取る

敵と味方の関の声、箴の音におどろきて、沖の鷗のちりちりぱつと、海陸一度に震動し
射出す征矢は秋の木ノ葉、打合ふ太刀は電光石火

群松風の樹がくれに、菊水の旗ひるがへし、楠判官正成と、名乗つて戦ふ決死の勇将
五十万騎の真中へ、駈け入り駈け入り、三時に亘る合戦に、人馬の息を休めけり

かかる所へ左馬頭、新手を代へて立ち向かふ

正成兄弟物ともせず、或は引組み、或は蹴散らし、一步も退かず戦ひしは

実に忠臣の鑑ぞと、美名を末世に残しけり